

EXTRA 号外

WRITING

これであなたも▶英文記者

★今週の担当は

高原 加奈子

【ジャパンタイムズ報道部記者】

No. 319



洋書「身長の2倍」を達成するまで

このコラムを担当していた伊藤サムさんは、読者の皆さんを叱咤激励しながら英語の面白さを伝えるST読者のよき先生でした。

それは、入社してからの私にとっても同じでした。私にとっては「先生」というより、「メンター(助言者)」といった方が近かったかもしれません。

私が伊藤さんをメンターと慕うようになったのは、伊藤さんへの1通のメールがきっかけでした。

「どうしたら英語が上手に書けるようになるのでしょうか!」

そんなメールを書いた当時の私は、ジャパンタイムズに入社して半年経ったところで、取材して英語で書いたり、日本語で配信されたものを翻訳したりした記事を、デスクに徹底的に直される日々が続いていました。

給料をもらっている「英語のプロ」であるはずの私には、プロと呼ばれるレベルには達していないことへの焦りがありました。私の海外滞在経験とい

えば、小学生のとき4年ほど米国にいただけでした。周りには10年以上海外に滞在していた記者や、大学まで米国にいたという記者がたくさんいただけに、劣等感に悩まされていたのです。

「それでも記者は続けたい。でも、このままだったら、私は使い物にならない記者になってしまう」

伊藤さんへのメールは、入社したばかりの私の中の焦りや不安が色濃く出た内容だったのです。

そんな私の相談に対する「答え」として、伊藤さんは、①英文記事を分析すること ②記事に出てくる知らない単語を覚えること ③洋書を積み上げて身長2倍になるくらい読むこと、という3つの課題を与えてくれました。伊藤さんは、これらの進ちょく状況を週一回メールで報告することを条件に、「コーチ」を引き受けてくれたのです。

■一年目に1メートル読んだけれど...

こうして私の英文記事と洋書漬けの

毎日が始まりました。電車に乗っているとき、取材で待っているとき、夜寝る前——どんなときも洋書を読みふける毎日です。

中学英語教科書レベルの本から始め、ペーパーバックの小説などに移行していきました。速いときは本の厚さにして週に3cm、また遅いときには0.5cmのときもありました。

東京駅近くにある八重洲ブックセンターには、仕事の帰りや週末によく通ったものです。程なくして、日本にもインターネットで書籍販売を手がけるアマゾンが進出し始めたので、そちらで洋書を買うことが多くなりました。月一回、3冊から5冊ぐらい買えば、読む本には困りません。

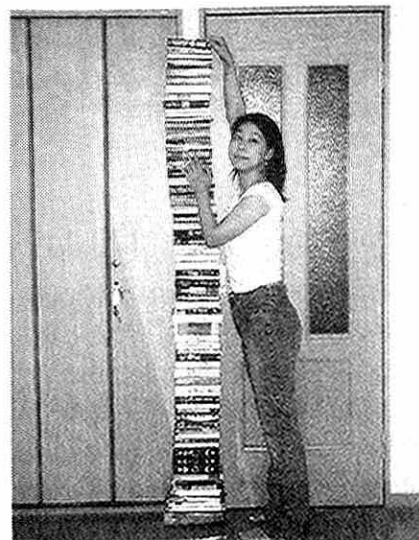
最初の一年で、1メートル分の洋書を読んだのですが、二年目は政治担当に異動になって忙しくなったこともあり、あまり進みませんでした。そういうときは、「このまま黙って止めてしまおうか」という思いが頭をよぎるのです。しかし、人に見られていると思うと、なまけるわけにもいきません。

また、「日本語の本が読みたい」という禁断症状とも戦わねばなりません。本屋さんの店頭で並んでいる書き下ろしの小説や、賞をとって話題を呼んでいる本などが、耳元で「読んでみたら」とささやくのです。でも、日本語の本を読んでしまうと洋書を読み進めることができないので、そこはぐっとこらえました。

そして「身長2倍」を始めてから3年経ったある日のことです。デスクから「最近高原さんの記事の英語が良くなったって評判だよ」と言われ、思わず顔がほころんでしまいました。

■とにかく始めて積み上げること

結局、4年近くかけて目標の3メートルを達成。「バカ正直によくやったな」というのが率直な感想です。



筆者(右)が4年近く達成した「身長2倍」。手元にあったものを積み上げただけでも2メートルほどになった(KANAKO TAKAHARA PHOTO)

そして3メートルを達成したころには、以前の焦りや不安は消えていました。「案ずるより産むがやすし」とはよくいったものです。「身長2倍の本を読めば、私も英語が上達するに違いない」と思って実践し始めたら、あまり悩まなくなっていたのです。

伊藤さんが言いたかったことも、きっとそういうことなのでしょう。「勉強法で悩むより、とにかく始めてみる。そうやって実績をコツコツと積み上げることによって、自信がついてくる」

今ならそれが分かります。そして、英文記者という仕事が英語力だけではできないということも——企画力、発想力、情報収集力、分析力、そして筆力——これらの力を合わせて記事を書くのだということ。だから、私の入社当時の悩みは、私の仕事の中のほんの一部分のことに過ぎなかったのです。

それでもやっぱり、あのときの劣等感や焦りが、私の原点だと思うのです。「身長2倍」は何らかの形で、私の血となり肉となっていると思えるからです。でも、もう一回やれと言われてもできないと思いますけどね。

★次週、このコラムは休載となります。

ちょっとひとこと...日々思うこと、考えること

企画記事のように長い文章を書くとき、私には必ず聞く音楽がある。アイルランドの歌手、EnyaのCDだ。

私はもともと「ながら」作業ができる人ではなく、学生のときから勉強する際は、テレビもラジオも音楽も全部消してからでないと集中できなかった。

その私が数年前、記事を書くときに何かの拍子でEnyaの曲をかけたら、ものすごく集中できることが分かった。記事がスラスラ書けるのだ。まさにEnyaさまさま。それ以来、私は彼女のCDを仕事場に常備している。

何がいいかというと、まず言葉が分からない。日本語や英語の歌だと、思わず歌詞に聞き入ってしまったら、一

緒に歌ってしまったりして集中できない。その点Enyaの歌はゲール語なので、聞き入ってしまうことはない。

それから、音楽が静かな夜を思わせるのが、私の集中力を高めるらしい。何か特別な脳波が出ている感じがする。

よく「漫画家や作家は夜型になる」といわれるが、それは夜の方が日常の雑音が少ないから静かに集中できることなのだろう。Enyaの音楽は、私の頭の中をいつでも深夜状態にしてくれる、まことに便利な道具なのだ。

ということで、私は企画記事を書くときはEnyaさまに登場していただいている。もちろん、この記事を書いている今も。